

〈研究報告〉

国際交流活動による児童の情意の変容

田上達人 長野県松本市立寿小学校

キーワード: Willingness to Communicate, 国際交流活動, 児童の情意要因

1. はじめに

小学校外国語活動が本格実施になったものの、学校教育現場では「コミュニケーション能力の素地」のとらえがまだ明らかではなく、外国語活動のねらいがはっきりしていない。「楽しい活動」を目指してゲームを多用しているが、英語の必要感をもたらすまでには至っておらず、スキル重視の活動が英語嫌いを生む懸念があり、児童の情意面に注目した活動づくりが求められている。また、学習指導要領の内容には「異なる文化をもつ人々との交流等の体験」(文部科学省,2008,p.9)とあるが、ALT との関わりに止まっている現状がある。

そこで筆者は、学習指導要領解説に「外国語を用いて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点を置いた」(文部科学省,2008,p.6)とあることから、「コミュニケーション能力の素地」の中核を「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」ととらえ、さらにそれを WTC と見なすことでねらいを明確にし、また、これまでの研究の知見を現場に生かそうと考えた。そして、外国語活動における前述の課題克服や WTC を高めるための方策として、国際交流活動に着目した。

2. 先行研究

2.1 WTC について

WTC は、MacIntyre(1998)らにより、「第 2 言語を用いて、特定の状況において、特定の人や人たちとの会話に参加する意思」(p.547: 訳は筆者)と定義されている、言語の使用場面を意識した学習者の内的要因モデルである。MacIntyre (1998)らは、情意要因や社会状況などの様々な変数が複雑に影響し合う第 2 言語コミュニケーションにおける個人差の要因を、図 1 のような概念モデルで表した。

このモデルは、左下から第 2 言語使用に至る異文化間の態度・接触動機といった社会的状況に影響を受ける要因と、右下から第 2 言語使用に至る性格・能力・自信といった個人的要因とが複雑に組み合わさっている様相を表している。また、上の 3 層は状況に応じて変化しやすい要因であるのに対して、下の 3 層は安定した要因と考えられている。しかし、このとらえをそのまま日本社会に適用していいのだろうか。

北米のような「人種のサラダボウル」と形容される様々な文化が混在する社会と日本社会とは、目標言語を話す人たちとの距離や関わり必要性が異なるため、自ずと母語以外の言語の

もつ意味が変化すると筆者は考えている。否応なしに異文化と触れる機会がある社会では、興味・関心がなくても、異文化の存在を意識したり、コミュニケーションを図る場面が多くなるが、日本のように母語以外の言語を話す必要性がほとんどない社会では、対人接触動機や興味・関心がなければ外国語を用いて自発的にコミュニケーションをしようとする意思は育ちにくい。

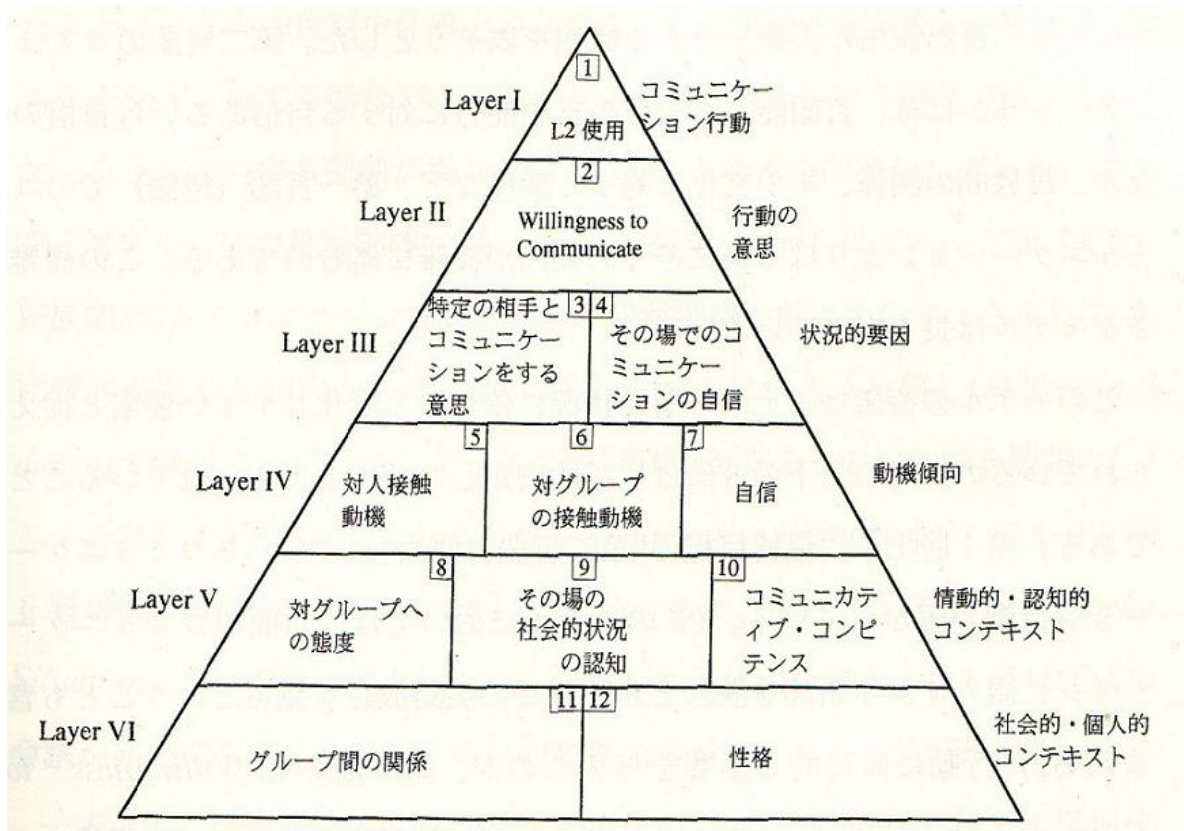


図1 第2言語におけるWTCモデル [MacIntyre *et al.* (1998, p. 547) : 訳は八島(2004)]

特に好奇心が強い児童の発達段階では、異文化への興味・関心が、異文化をもつ人への対人接触動機に影響を与えられと考えられる。筆者は、WTCモデルの左下から第2言語使用に至る異文化間の態度・接触動機といった要因は、日本では状況に応じて変化し、これらを国際交流活動で高めることでWTCにより影響を与えられるのではないかと考えている。

八島(2004)は異文化に対する興味・関心を国際的志向性という概念を用いて、WTCに影響を与える要因としてとらえている。八島は国際的志向性を以下の4要素から構成されると定義している。

- ①異文化友好オリエンテーション(文化的な英語学習理由)
- ②異文化間接近—回避傾向(異文化をもった人と関わりをもとうとする傾向)
- ③国際的職業・活動への関心
- ④海外での出来事や国際問題への関心

八島は、国際的に活動することや海外のニュースといった広い意味で異文化に対する興味・関心をとらえているが、本稿の対象は小学生なので、③④の要素は発達段階から見て適切ではないと考えている。本稿の異文化に対する興味・関心は、対象が小学校段階であることを考慮して、八島の定義の①②の部分の意味している。

2.2 WTCに関する先行研究

Yashima(2002)が大学1年生を対象に、英語学習に関連する情意要因の相関を調査したところ、図2のような結果となり、以下の知見が得られた。

国際的志向性が高いと英語学習意欲が高くなり($r = .79$)、英語学習意欲が高いと英語コミュニケーションの自信が高くなり($r = .41$)、英語コミュニケーションの自信が高いとWTCが高くなる($r = .68$)が、国際的志向性と英語コミュニケーションの自信や、英語学習意欲の高さとWTCには直接の関係が見られなかった。また、国際的志向性とWTCの間に弱い相関($r = .22$)が見られた。

これは、WTCは図2のような段階を経て高まっていくことと、自信の高まりが不可欠なことを示唆していると筆者はとらえている。

Yashimaは国際的志向性と英語コミュニケーションの自信がWTCに影響を与えることから、外国の文化・出来事に関心をもたせ、かつ生徒の不安をなくして自信をつけさせることができれば、英語によるコミュニケーションを促すことが可能であるとしている。

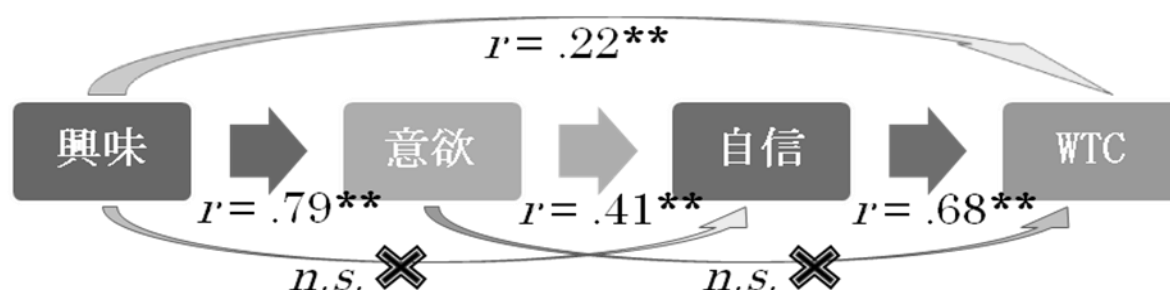


図2 Yashima(2002)のL2 Communication Modelを筆者が簡略化した図

ここから、WTCを高める要因として考えられる異文化への興味・関心や、英語コミュニケーションの自信が、国際交流活動で高められることが認められれば、異文化との接触がWTCを高める方策になると言える。WTCと国際交流活動の関連について、今後研究を深めたい。

Yashima(2009)は国際ボランティアに参加した大学生を、非参加者の統制群と比較して調査したところ、国際ボランティア参加者、つまり異文化に接触した大学生のWTCと世界に向かって伝えたいことがあるという意識の高まり、また英語使用不安の低下が認められた。不安は自信の裏返しであると筆者は考えているので、異文化との接触がWTCと自信の高まりをもたらしたととらえている。

WTCを高めたとする異文化との接触は、学校現場において国際交流として実践されることが多い。国際ボランティアといった活動に参加することが難しい児童に、どのような異文化と

の接触が適切なのかを今後考えていきたい。その前段階として、異文化との接触が児童の情意面にどのような影響を及ぼすかを本稿では明らかにしようとしている。また、児童の発達段階において、WTC の概念を用いて量的な調査をした先行研究が見当たらないことも、本稿の着想の源となっている。

2.3 国際交流活動

瀧口(2002)は、アメリカの高校生とインターネットを利用した顔が見えるリアルタイム発信授業を2回(計4時間)行った中学1年生32名を対象に、発信授業をしなかったクラスの生徒と比較しながら、英語学習への興味・関心の情意的側面への影響と、英語発話向上への有効性を調査した。この研究によると、英語に関する興味・関心を表す興味内発的因子の高まりに有意差が見られたが、英語を「話したい」「理解したい」といった意欲を示す達成伝達因子は有意な変化が見られなかった。

瀧口は、興味・関心などの内発的動機付けを高める発信授業が生徒の意識変革に有効であるとしながら、英語の発話向上のためには、さらに体験を積み重ねて慣れさせることが肝要であると結論付けた。

コミュニケーションへの意欲を高めるためには継続した活動が必要であろうが、わずかな活動でも英語への興味・関心を高めたことは注目すべき知見であると筆者はとらえている。

今日、ICTが教育現場にもたらされ、今後も大いに有効活用されることが期待されるが、インターネットを利用したリアルタイムの交流は、小学生にどのような影響をもたらすのだろうか。

栄利(2008)は日本の小学6年生とアメリカの2～5名の小学生や先生がバーチャルクラスルームという音声のやりとりと写真やイラストが見られる発信システムを利用して、14回にわたってリアルタイムで会話をする実践を行った。事前・事後で交流経験の多いクラスと少ないクラスで比較したところ、交流経験の多いクラスは外国への関心が高まり、ヒアリングも向上した。しかし、他の外国人とさらに積極的に話したいという意欲にはつながらなかった。

瀧口がテレビ電話による発信授業の利点に、相手の表情が見えるので、こちらが話していることが上手く伝わっているのか、あるいは相手が困惑しているのかがすぐわかり、音声だけの電話のやりとりも対話が円滑に進められることを挙げているように、音声にリアルタイムの映像を加えることでより現実に近いコミュニケーション活動となり、興味深い交流になると思われる。

テレビ電話による発信を加えた国際交流活動では、児童にどのような変容がもたらされるのか研究を進めたい。

林原(2010)らは、小学5年生75名を対象に、アジアなどからの留学生と2回にわたって英語により直接コミュニケーションをはかる国際交流活動を行い、事前と事後の変化に影響を与える要因を因子分析により探った。その結果、外国語への関心と国際交流への関心の高まりに有意差が見られた。ただし、直接外国の文化に接触してみたいという興味を示す異文化体験因

子や、世界的に課題となっていることに対する興味や学習意欲を示す地球的課題因子に有意差は見られなかった。

ここまで先行研究を見てきたが、国際交流活動は英語や異文化への興味・関心は高めるものの、WTCを有意に高めているとは言えない。はたして国際交流活動は、WTCを高めるための方策には成り得ないのであろうか。また、今後学校教育現場でも多用されると思われるテレビ電話を利用した国際交流活動を経験した小学生を対象にして、事前と事後の変容を、実験群と統制群の比較から量的に研究し、国際交流活動の影響を明らかにしたものは見当たらなかった。

2.4 児童の情意要因

Carreira(2006)は小学3年生と6年生を対象に年齢による動機づけの変化を調査した。そうすることに喜びを感じるのか、自分の好奇心を満足させるというような、内からの欲求・衝動により喜びや満足感を求めてある行為をその行為自体のために行う内発的動機も、いい成績をとるなどの外的な報酬を手に入れるとか罰を回避するといった、目標への手段としてある行為に取り組む外発的動機も、3年生の平均値が6年生の平均値より高かった。ここから、Carreiraは年齢が進むにつれて学習意欲が低くなると結論付けた。

Carreira論文の内発的動機をみる質問項目は、「英語の授業はとても楽しいです。」、「英語の授業のある日は楽しみです。」、「もっと英語の授業があったほうがいいです。」などであり、筆者はここで得られたデータは活動への好意度と言い換えられると考えている。

学習の意味を見いだそうとする高学年にとっては、ゲームだけでなく、国際交流などの活動を行い、活動への好意度を高めていく必要があるのではないだろうか。

小学校4・5年生の英語学習動機づけについて研究した國本(2006)によると、英語への好感度高位群は、英語に興味があり、有用だから英語を学習したいという学習動機づけが高いことが明らかになった。

英語の有用感を高めるのは、日本語で話せば事足りる気心知れたクラスメイトと英語で話す活動よりも、インフォメーション・ギャップがある異文化をもつ人と、現在持っている言語能力を最大限に使ってでもコミュニケーションしようとして、理解できたことに喜びを見いだす経験のほうが効果的なのではないだろうか。

言語教育と異文化との関連を重視する八島(2003)は以下のように述べている。

「世界の人々とのコミュニケーションを最終の目的とするのであれば、教室の先に広がる異文化コミュニケーションの可能性と関連要因を考慮しないわけにはいかないはずである。つまり、英語教育においては、英語に対する態度、英語を話す人に対する態度、外国人や異文化性に対する情意的反応、国際的な職業や活動に対する志向性、つまり学習者にとって自分と社会や世界との関係において英語がどのような意味をもつか(つまり漠然とでも世界と自分をつなぐものと感じるかどうか)は、学習意欲に影響すると同時に、英語でコミュニケーションを図ろうとする傾向にも影響すると考えられる。」(p.90) 全く同感である筆者は、継続的な国際交流活動が児童に異文化との出会いをもたらし、それが情意面に良い影響を与えていると考えている。

小学5・6年生を対象に、動機づけ尺度といくつかの影響要因の相関を研究した安達(2009)

は、自信などの英語に関する学習意識や外国人に対する積極性と動機づけとの相関が高いことを明らかにした。また、対象児童が国際交流を経験していることにより、コミュニケーション態度が高くなっていることを指摘し、英語使用者の多様性を知ることや多様な外国人と接触する交流活動が有意義であると結論付けた。

筆者はこれまでの研究の知見をもとに、児童の情意面にスポットを当て、情意要因同士の相関関係を明らかにし、また、国際交流活動が児童の情意面にどのような影響を及ぼすのかを研究することで、小学校外国語活動のあり方を考察する一助にしたいと考えている。

3. 実験

3.1 研究の目的

本研究は、筆者が小学校外国語活動のねらいとしてとらえている WTC を高める方法を探るため、以下の2つのリサーチクエスチョンを探索することを目的としている。

RQ1. 児童の情意面の要因同士がどのような相関関係にあるのか

RQ2. 国際交流活動が児童の情意面にどのような影響を及ぼすのか

3.2 研究の方法

(1) 調査対象者

長野県内の公立小学校 A の 5 年生 2 クラスの児童 58 名を調査対象者とした。この児童は、1 年生の時から年間 5～15 時間の英語活動を経験している。2010(平成 22)年度の 5 年生の外国語活動は年間 35 時間の予定で行われているが、全ての授業時間を ALT と JTE(日本人英語教師)が入れ替わり担当している。つまり、ALT と JTE が中心指導者として学年のどのクラスも同内容の活動を行っており、担任教師はごくまれにやりとりの見本になる場面があるだけで、ほとんど活動に関わっていない。以上のことから、2つのクラスの外国語活動の内容や担任の出に差がないと考えられる。

(2) 調査内容

質問紙は 6 件法の評定尺度を用いて、線分上に選択肢(全くそう思わない、そう思わない、どちらかというと思わない、どちらかというと思おう、そう思う、とてもそう思う)を等間隔で示し、筆者が児童の情意面の要因として考える以下の 6 項目について調査した。

- ①私は外国語(英語)活動が好きです。(外国語活動への好意度)
- ②外国(異文化)のことをもっと知りたい。(異文化への興味・関心)
- ③英語でコミュニケーションするために、もっと学習したい。(英語学習意欲)
- ④簡単な英語を使ってコミュニケーションすることに自信がある。(英語コミュニケーションの自信)
- ⑤自分から進んで、外国人(異文化をもつ人)と英語でコミュニケーションしたい。(WTC)
- ⑥いつか海外に行ってみたい。(海外渡航願望)

国際交流活動による児童の情意の変容

(3) 調査手順

総合的な学習の時間に国際交流活動を実施したクラスと実施しなかったクラスを、それぞれ交流群・非交流群とし、調査対象の58名の児童に対して、2010年4月(交流群:9日, 非交流群:14日)と12月(交流群:6日, 非交流群:7日)に同内容のアンケート調査を実施した。なお、非交流群の欠損データがあった2名を除いたため、交流群29名(男子16名, 女子13名)と非交流群27名(男子14名, 女子13名)となり、調査対象児童は56名となった。授業時間の一部を使って担任教師の監督のもとで実施し、回収率は100%であった。データは、6段階の評定をそれぞれ数値化(「全くそう思わない」を1~「とてもそう思う」を6)して入力した。

(4) 分析方法

2つのリサーチクエスチョンについて、統計ソフトSPSS(Statistics18)を使用して分析を行った。

RQ1:児童の情意面の要因同士がどのような相関関係にあるのか探索するために、相関分析を実施した。有意水準を5%と設定し、 $r = .7$ 以上を強い相関、 $.4 \sim .7$ を中程度の相関、 $.2 \sim .4$ を弱い相関があると見なした。

RQ2:国際交流活動をしたことが児童の情意に影響を及ぼしたかどうかを検討するために、各項目について2要因分散分析を実施した。交流経験を被験者間要因(2水準)とし、時期を被験者内要因(2水準)とした。有意水準を5%と設定した。

(5) 国際交流活動の概要

交流群のクラスの国際交流活動は全て総合的な学習の時間を利用して行った。

異文化を持つ人とのコミュニケーションができるように考え、①実際に会おうコミュニケーション活動を2回(6/8, 11/1), ②テレビ電話を通したオーストラリア・タスマニア州のマウント・カーメル・カレッジ(Mount Carmel College)の同年代の児童とのコミュニケーション活動を2回(7/21に通信テスト, 11/2, 12/2)実施した。

また、上記の交流に伴い、相手校のホームページを見たり、所在地を探すなどのインターネットを利用する時間を2時間、オーストラリアのイメージを出し合ったり、交流のあり方を考え合う時間を3時間、実際のテレビ会議の前に筆者が以前行っていた交流の時にアメリカから送られてきたビデオレターを見て、双方の学校生活を比較したり、速い英語の言い回しに慣れ親しむ時間を2時間実施した。

①2010年6月8日 料理教室

筆者のアメリカ人の友人を招いて、全て英語の説明を聞きながらクッキーを作って食べる活動を行った。最初の種づくりでは、班毎1列に並んで先頭から数字を言い、その数字ごとに仕事を割り当てる場面があったが、全て英語のみの指示に対して戸惑いを見せる児童が多く見られた。しかし、何度も言い換えたり、ジェスチャーで示してくれたので、徐々に理解できるようになってきた。「最初はあまりわからなかったけど、どんどん慣れてきたら、英語が結構わかるようになりました。」、「アメリカ人との交流は初めてなので心配しましたが、なんとなくわかりました。わからないときは手で教えてくれて、とてもわかりやすかつ

たのでまたやりたいです。」という感想から、英語を聞こうとする姿勢や理解の高まりが感じられた。

全て英語によるコミュニケーションだったにもかかわらず、「一つひとつの材料から作るのは初めてでした。カレンさんに、『うまく焼けているねっ。おいしそう。おいしい?』とほめられて、もっとテンションが上がったし、クッキーの味は『デリシャス!』でした。」という感想からは、その場の状況から英語が理解しやすい環境にあることと、英語を聞くことが英語を使うきっかけになることが感じられた。

②2010年7月21日 回線テスト

マウント・カーメル・カレッジとの交流のために、まずはテレビ電話の回線テストを実施した。

予定の時間につながらず、諦めて漢字テストをやっている最中につながったので、音声や映像を児童に提供するまでに時間がかかり、ほんの5分程度のやりとりだったが、向こうの子どもたち(5年生)が「〇〇小学校のみなさん、こんにちは。」と日本語で言ってくれたのを聞いて大いに喜ぶ姿が見られた。

その後、「自己紹介をしたい。」、「じゃんけんしてみたい。」とこれからの交流について話し合いをしたり、地図帳を使って学校があるタスマニア州の州都ホバートを探したり、時差を考えたり、縮尺から距離を考えるなど、児童の疑問から学習を深めることができた。

また後日、オーストラリアのイメージや知っていることを出し合ったり、オーストラリアの人たちが日本にどんなイメージを持っているのか、どんなことを知っているのか予想するなど、互いの文化について学習する時間を設けた。

③2010年11月1日 双方の遊びで交流

クラス児童の家にホームステイに来たオーストラリア人を招いて双方の文化を知ingことを目的に交流活動を行った。オーストラリアの遊びを教えてもらったり、日本の遊びを教えてあげたりしてコミュニケーションを図った。最初に日本の「花いちもんめ」を紹介したら、オーストラリアでよくやる遊びとして「ホーキー・ポーキー」を紹介していただき、みんなで体を動かして楽しい雰囲気になることができた。「ダック、ダック、ゲース」と「ハンカチ落とし」や、「インディアンとティピ」と「氷鬼」など似たような遊びを交互に楽しむ中で、オーストラリアと日本の遊びの同じ要素に気づき、似ていることに驚きの声が上がった。

次に、クラスの子どもたちからの質問に対して、写真や映像を交えながら答えてもらった。野球のもとになったクリケット、激しいタックルに思わず声が出たオーストラリアン・フットボールなどのスポーツ、ミートパイやベジマイトなどの食べ物、キャラクターの名前が違うポケモンの話などが聞けた。

講師の希望で日本語を交えながらの交流だったが、今回は双方の文化を見つめるという点で良い機会となった。

④2010年11月2日 テレビ電話による交流(約30分)

相手校の6年生とようやくテレビ電話を利用した交流ができた。

国際交流活動による児童の情意の変容

最初にスタッフ同士で挨拶をした後、クラス全体で挨拶をした。次に事前に子どもたちが決めて練習していた歌とリコーダーの「少年時代」を発表した。「歌を歌っている時、体を動かしていてうれしかった。」、「向こうの人たちのリアクションが面白かった。」の感想のように、聞いてくれている姿がとてもうれしく感じていたようだ。それから、1対1になって英語・日本語を交えながら自己紹介をした後、じゃんけんをした。「オーストラリアの人たちが、日本語を話してくれてうれしかった。」、「英語も日本語も使えて楽しい交流になった。」との感想があるように、2つの言語を織り交ぜながらも何とかコミュニケーションを図ろうとする姿があった。「異文化同士で交流できて、文化や言葉がなんとなくわかって楽しかった。」、「オーストラリアの人たちは元気で面白いと思った。」、「じゃんけんは、両方のクラスが盛り上がって楽しかった。」との感想が挙げられた。

⑤2010年12月2日 テレビ電話による交流(約30分)

相手校の6年生にとっては最後となる交流だった。

今度は向こうから、「Are you sleeping?」の曲に乗せた日本語のあいさつ歌の発表があった。こちらから「翼をください」を歌った後、前回の続きの児童からじゃんけんをした。今回は、自己紹介だけでなく簡単な質問もあった。「Do you like school?」と聞かれ、即座に「Yes, I do.」と答えたり、「Do you have pets?」に対して、「No, I don't.」と答え、筆者が同じ質問を返すように促しはしたが、「Do you have pets?」と質問し、「Yes, I have a dog.」と答える場面があり、児童が受け答えできると思っていなかった筆者は驚かされた。「前にやった時よりも言葉が少しわかってよかったです。」と英語を聞き取ることに慣れてきた感想や、「どちらの言葉も通じるようになりたい。」、「英語をべらべらにして、オーストラリアといっぱいしゃべりたい。」、「今度はもっとたくさん質問などを出し合ったりしたい。」、「今度はじゃんけんではなく、学校のことを質問したり遊んだりしたい。」など、コミュニケーションに意欲的な姿勢を示す感想が見られた。

また、「交流はおもしろいなあと改めて思った。」との感想があり、継続的な交流活動で特定の対人接触動機が高まってきたことを感じた。

⑥テレビ電話を利用することの利点と課題

リアルタイムの交流は、「(向こうの子どもたちが)ハイテンションで楽しかった。」という感想があるように、相手の動作や表情、息づかいまでもが伝わってくるようなリアルさがある。反応がすぐに伝わり、情報や感情のやりとりができるため、「相互作用をもたらす他者との感情や意味の共有を目指す対話」としてのコミュニケーションになりうる可能性がある。

特に、「歌を歌った時にノリノリで聞いてくれておもしろかった。」、「真剣に聞いてくれてうれしかった。」との感想が示すように、こちらが歌を歌っているときのリアクションがとても印象に残ったようで、どのように聞いたら相手が喜んでくれるのか客観的に考える機会となった。

しかし、「違う方法で交流したい。」という感想もあるように、映像が途中で止まってしまったり、音声途切れて中断してしまったりすることがあり、ストレスになったり集中が切れて

しまう時間があつたことも事実であつた。やはり、それぞれの交流手段が持つ良さを生かして、複数の方法で交流を継続させる必要があると考える。

4. 結果

4.1 児童の情意面の要因同士がどのような相関関係にあるのか

相関分析の結果、児童の情意面の要因同士の相関は表1のような結果となり、どの要因同士にも相関が見られた。

表1 児童の情意要因の全相関係数(4月アンケート分)

		活動への 好意度	異文化へ の興味	英語学習 意欲	コミュニ ケーショ ン自信	WTC	渡航願望
活動への 好意度	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	1	.552** .000	.780** .000	.502** .000	.675** .000	.309* .020
異文化へ の興味	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.552** .000	1	.806** .000	.373** .005	.660** .000	.426** .001
英語学習 意欲	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.780** .000	.806** .000	1	.493** .000	.828** .000	.514** .000
コミュニ ケーショ ン自信	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.502** .000	.373** .005	.493** .000	1	.500** .000	.301* .024
WTC	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.675** .000	.660** .000	.828** .000	.500** .000	1	.482** .000
海外渡航 願望	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)	.309* .020	.426** .001	.514** .000	.301* .024	.482** .000	1

** . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。 * . 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

本稿において小学校外国語活動のねらいとして重視している WTC は、特に英語学習意欲 ($r = .828$)、外国語活動への好意度 ($r = .675$)、異文化への興味・関心 ($r = .66$) と高い相関があつた [図3参照]。

国際交流活動による児童の情意の変容

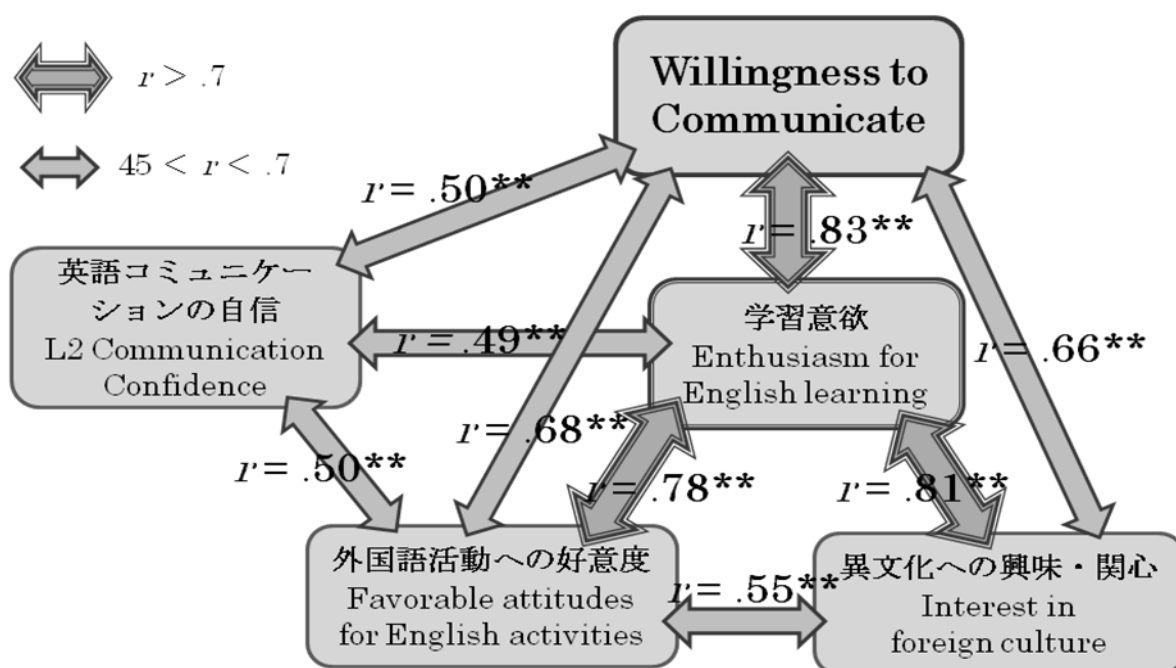


図3 特に相関が高い児童の情意要因の関係 (4月アンケート分)

4.2 国際交流活動が児童の情意面にどのような影響を及ぼすのか

交流群と非交流群の情意要因についての2回のアンケート結果は表2のようになった。

表2 交流群と非交流群の2回のアンケート結果

	4月			12月		
	人数	平均	標準偏差	人数	平均	標準偏差
交流群						
外国語活動への好意度	29	3.14	1.70	29	4.10	1.16
異文化への興味	29	3.31	1.84	29	4.48	1.10
英語学習意欲	29	3.17	1.70	29	4.10	1.16
英語 communication 自信	29	3.45	1.40	29	3.41	1.38
WTC	29	3.34	1.86	29	3.90	1.24
海外渡航願望	29	4.45	1.77	29	5.07	1.14
非交流群						
外国語活動への好意度	27	4.00	1.62	27	4.00	1.69
異文化への興味	27	3.74	1.61	27	4.04	1.32
英語学習意欲	27	3.52	1.72	27	4.48	1.42
英語 communication 自信	27	2.67	1.62	27	3.30	1.51
WTC	27	3.22	1.60	27	3.63	1.74
海外渡航願望	27	4.74	1.83	27	4.74	1.91

4月と12月の平均値の変化を見ると、ほとんどの要因が両群とも上昇しているが、注目すべきは、交流群の英語コミュニケーションの自信に上昇が見られなかったことである。今回交流群が実施したインターネットのテレビ電話は言語によるコミュニケーションを重んじたものであり、英語を用いる現実の世界との交流であった。それらは異文化に対する興味・関心が高まるという利点があるものの、現実の速くて聞き取りづらい英語を目の当たりにしたことや、1対1のテレビ会議で、「相手の英語が聞き取れなかったらどうしよう」、「相手に伝わらなかったらどうしよう」という不安や緊張感が、自信の高まりを阻害したのではないかと考えられる。

本稿で外国語活動のねらいとして重視している WTC は、交流群の平均値で 3.34 から 3.90 に上昇しているが、これが交流活動によってもたらされたものであるかはわからない。次に、国際交流活動が児童の情意面のそれぞれの要因に影響を及ぼしたかどうかを検討するため、各項目について 2 要因分散分析を実施したところ、以下の 2 要因に有意差が見られた。

①私は外国語(英語)活動が好きです。(外国語活動への好意度)

「私は外国語(英語)活動が好きです」という項目についての結果は次の通りであった。交流経験要因 [$F(1, 56) = 1.230, p = .272$] の主効果は有意でなかったが、時期 [$F(1, 56) = 4.023, p = .050$] の主効果は有意であった。また、交流経験要因と時期の交互作用は、 $F(1, 56) = 4.023, p = .050$ で有意であった。すなわち、両群とも 4月から12月にかけて外国語活動が好きであるという思いが強まり、特に交流群ではその変容が非交流群よりも大きかったことが示唆される。

②外国(異文化)のことをもっと知りたい。(異文化への興味・関心)

「外国(異文化)のことをもっと知りたい」という項目についての結果は次の通りであった。交流経験要因 [$F(1, 56) = 0.001, p = .982$] の主効果は有意でなかったが、時期 [$F(1, 56) = 11.488, p = .001$] の主効果は有意であった。また、交流経験要因と時期の交互作用は、 $F(1, 56) = 4.088, p = .048$ で有意であった。すなわち、両群とも 4月から12月にかけて異文化への興味・関心が強まり、特に交流群ではその変容が非交流群よりも大きかったことが示唆される。

5. 考察

5.1 WTC は、児童の英語学習意欲、外国語活動への好意度、異文化への興味・関心と高い相関がある(結論1)

児童の情意には様々な要因があり、それが複雑に影響し合っていると考えられる。

実験結果から、WTC は英語学習意欲($r = .828$)、外国語活動への好意度($r = .675$)、異文化への興味・関心($r = .660$)との相関が高いことが明らかになった。

ここから、小学校外国語活動において、英語学習意欲、外国語活動への好意度、そして異文化への興味・関心を高めることは、WTC の高まりに良い影響をもたらすと考えられる。

しかし、学校教育現場において、「英語学習意欲や外国語活動への好意度を高めるべきである」と言われても、具体的な策を講じる際に何をしたらよいか見えない。そこで、これらの要因と

高い相関が見出され、Yashima(2002)の研究でも学習意欲を高めることが明らかになっている異文化への興味・関心を高めることが、学校教育現場で取りかかりやすい方法であると言える。

また、それと同時に児童の英語コミュニケーションの自信を高めることも念頭に置かなくてはならない。異文化への興味・関心と英語コミュニケーションの自信は相関がある($r = .373$)が、他の要因同士の相関と比べると低い傾向にある。Yashima(2002)の調査では、筆者が小学校段階では異文化への興味・関心と同義であるとしてとらえている国際的志向性と英語コミュニケーションの自信には直接の関係が見られなかった。ここから、異文化への興味・関心と英語コミュニケーションの自信の2要因の関係は、どちらか一方が高められることによって他方も高まっていくという相乗効果があまり期待できないと言える。

つまり、WTCと相関のある異文化への興味・関心を高めることは有効であるが、同時に英語コミュニケーションの自信も高める必要があると考えられる。WTCと英語コミュニケーションの自信には中程度の相関($r = .500$)があり、Yashima(2002)の調査でも、英語コミュニケーションの自信が高いとWTCも高くなる($r = .68$)ことが報告されている。異文化への興味・関心を高めるために、よかれと思って異文化をもつ人との直接的な交流のみを多くして、児童の自信を失わせることのないように配慮する必要がある。

さらに、Yashima(2002)の調査ではWTCと英語学習意欲に直接の関係は見られなかったが、今回の調査では高い相関($r = .828$)が見られた。

これは、Yashimaが研究対象にした大学生は、これまでのテストや受験の経験により、英語学習が外発的動機づけによってもたらされたものが多く、WTCと英語学習意欲が結びつきにくい特性を持っていると考えられる。これに対して、児童は異文化をもつ人と「話したい」、「関わりたい」という意欲がすぐに行動に結びつくという、内発的動機付けを高めやすい発達段階にあると考えられる。英語学習意欲と異文化への興味・関心の高い相関($r = .806$)も見られることから、意欲的な英語学習者となるきっかけづくりのためにも、小学校段階において異文化をもつ人との交流など異文化への興味・関心を高める活動を実施できるとよい。そうして、英語学習意欲や異文化への興味・関心の高まりは、その後のWTCの高まりにつながっていくと考えられる。

5.2 国際交流活動は、児童の外国語活動への好意度と異文化への興味・関心を高める(結論2)

国際交流活動を経験したクラスは、外国語活動への好意度と異文化への興味・関心が有意に高まった。

ここから国際交流活動は、MacIntyre(1998)らの「第2言語におけるWTCモデル(図1)」の中の「⑧対グループへの態度」、「⑤対人接触動機」、「⑥対グループの接触動機」といった左下の要因を高める効果があるとは考えられないだろうか。MacIntyreらは、モデルの下層部はあまり変化しない安定している要因であるとしてとらえているが、今回の交流群は少ない交流回数(オーストラリアの小学校とテレビ会議を通じた交流を2回、英語話者との直接交流を2回実施しただけ)にもかかわらず、異文化への興味・関心が有意に高まったことから、日本のような社会的文脈においては下層部の左側の部分は状況に応じて変化する要因になりうるかと筆者は考える。

つまり、左下の要因を高めることを意図した活動を行っていくことで、小学校外国語活動のねらいと考えている WTC を高めることになりはしないだろうか。

また、八島(2003) は「第 2 言語における WTC モデル(図 1)」の右下から上へとつながる、性格、コミュニケーション能力、自信、WTC の部分は、教室状況での情意的側面にも直接関連するとしている。しかし今回の結果により、国際交流活動が外国語活動への好意度と異文化への興味・関心を高めることが明らかになったので、左下から WTC につながる部分も、外国語活動への好意度の高まりといった教室状況での情意的側面に直接関連していると考えられる。

5.3 国際交流活動が児童の WTC を高める可能性がある

交流群の WTC は高まったものの、国際交流活動が WTC を高めることの有意な効果は見られなかった。しかし、結論 1 と結論 2 から三段論法で考えてみると、国際交流活動が WTC を高める可能性があることが示唆された。

ではなぜ、国際交流活動が WTC を直接高める要因として認められなかったのだろうか。

筆者は次の 2 つの理由を今後の小学校外国語活動のあり方を探る視点にしようと考えている。

①WTC は、外国語活動への好意度と異文化への興味・関心に比べ、高まるのに時間がかかる。

MacIntyre (1998)らの「第 2 言語における WTC モデル(図 1)」を見ると、様々な要因が複雑に関連し合っていることがわかる。国際交流活動で高まることが明らかになった外国語活動への好意度と異文化への興味・関心は、4 層目の「動機傾向」や 5 層目の「情動的・認知的コンテキスト」に属する要因ととらえられ、それより上位に属する WTC の高まりは図 2 のように段階的であり、時間と他の要因の変容が必要なのではないだろうか。

この点から、指導者は児童を望ましい姿に性急に变容させようとするのではなく、様々な情意要因が影響し合っていることを踏まえて、それぞれの児童の WTC の高まりに必要な情意要因を見極め、それを高める指導をしていけるとよい。

②WTC を高めるためには、英語コミュニケーションの自信の高まりが必要条件となる。

「表 2 交流群と非交流群の 2 回のアンケート結果」から明らかなように、全てのデータの平均値を比較した中で、国際交流活動を経験したクラスの英語コミュニケーションの自信には高まりが見られなかった。これは、交流で使う言い回しに慣れ親しむ活動を十分にしないまま、1 対 1 のテレビ電話で現実の速くて聞き取りづらい英語に触れたことで、「コミュニケーションできなかったらどうしよう」という不安や緊張をもたらし、それが自信の高まりを阻害したと考えられる。

また、「図 3 特に相関が高い児童の情意要因の関係 (4 月アンケート分)」からもわかるように、英語コミュニケーションの自信は、WTC、英語学習意欲、外国語活動への好意度と相関が見られる。ここから、WTC の高まりには英語コミュニケーションの自信の高まりが必要条件になると考えられる。

これは Yashima(2002)が主張するように、WTC を高めるためには国際的志向性 (外国に対する興味・関心) の高さだけでなく、英語コミュニケーションの自信の高まりが必要なことが、児童の発達段階にもあてはまることを確認する結果となった。

国際交流活動による児童の情意の変容

今後、児童の英語コミュニケーションの自信を高める活動を国際交流活動と平行して行うこと、また異文化を持つ人との継続的な交流を通して英語コミュニケーションの自信が高まることで、WTCが高められることが推測される。

安達(2009)が「初期外国語学習者の動機づけは学習者の心理的、認知的、社会的状況によって、変化したり、さほど変わらなかったりすると考えられ、初期外国語学習者の動機づけの変化や動機づけとそれに影響を与える要因の関係を解明することは、今後、本格的な英語活動の開始に伴い、その方向性を検討する上で十分意義あるものと考えられる」(p.45)と言うように、英語嫌いの出現が報告される中、小学校外国語活動のあり方を児童の情意要因を視点にして研究することは、活動に関わる人間にとっての至上命題ではないだろうか。

6. 成果

本稿は、調査対象者の数やアンケート項目の信頼性、検定の方法などを見るとまだパイロット・スタディーの段階であるが、本田(2005)が「これまで動機づけを中心として考えられてきた年少の学習者の情意的側面に、海外でも比較的新しい概念であるWTCを導入し、日本の小学校英語教育の効果について検討していく必要がある」(p.61)と言うように、WTCという今日脚光を浴びている概念を小学校段階に持ち込み、他の情意要因との相関を見ることができたこと、また、国際交流活動による児童の情意の変容を、実験群と統制群を用いた量的研究により示すことができたことは、今後の小学校外国語活動のあり方を考える上での成果であると言える。

今後、教育現場に国際交流活動が取り入れられ、平和な地球の未来をつくるために、様々な文化をもつ人々と対話する地球市民を育成する教育が広まることを祈念して、本論文を完結する。

謝 辞

本稿は、筆者が2011年に提出した信州大学大学院教育学研究科修士課程学位論文『Willingness to Communicateを高める小学校外国語活動：国際交流活動による児童の情意の変容』を修正したものである。親身な指導をしていただいた土井進教授、酒井英樹教授、谷塚光典准教授を始めとする信州大学の先生方、現場と研究の両立をサポートしていただいた前任校である安曇野市立穂高北小学校の百瀬新治前校長先生を始めとする職員の皆様、アンケート調査や交流活動に理解と協力をしてくれた児童・保護者の皆様のおかげで論文にまとめることができました。ここに感謝の意を表します。

文 献

- 安達理恵(2009). 小学校英語学習者の動機づけの影響要因. *児童英語教育学会紀要*, 28, 43-64.
- Carreira-Matsuzaki, J. (2006). Motivation for learning English as a foreign language in Japanese elementary schools. *JALT Journal*, 28-2, 135-157.

- 林原慎・石原直久・岡芳香・加藤秀雄・金田敏治・小早川善伸・三田幸司・杉川千草・高橋法子・中島敦夫・天野弥生・中村千絵・三藤宏子・中尾佳行・平川幸子(2010). 小学校国際理解教育における国際交流学習の効果：児童の特性からの検討. *広島大学学部・付属学校共同研究機構研究紀要*, 38, 41-46.
- 本田勝久(2005). 第二言語習得における学習者要因：動機づけの新しい枠組みについて. *大阪教育大学英文学会誌*, 50, 51-70.
- 國本和恵(2006). 「英語への好感度」が小学4・5生の英語学習動機づけに及ぼす影響. *日本児童英語教育学会紀要*, 25, 75-87.
- MacIntyre, P. D., Clement, R., Dornyei, Z., & Noels, K. (1998). Conceptualizing Willingness to communicate in a L2 : A situational model of L2 confidence and affiliation. *Modern Language Journal*, 82, 545-562.
- 文部科学省(2008). *小学校学習指導要領解説 外国語活動編*. 東洋館出版社.
- 栄利滋人(2008). 外国の小学校とインターネットでの交流体験を活用した英語活動. *STEP BULLETIN*, 20, 116-135.
- 瀧口均(2002). インターネットのテレビ電話システムを使った海外とのリアルタイム交信授業：情意面と発話向上への影響. *STEP BULLETIN*, 14, 142-155.
- Yashima T. (2002). Willingness to communicate in a second language : The Japanese EFL Context. *The Modern Language Journal*, 86, 55-66.
- 八島智子(2003). 第二言語コミュニケーションと情意要因：「言語使用不安」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」についての考察. *外国語教育研究*, 5, 81-93.
- 八島智子(2004). 外国語コミュニケーションの情意と動機. *関西大学出版部*.
- Yashima T. (2009). 海外研修による英語情意要因の変化：国際ボランティア活動の場合. *JACET Journal*, 49, 57-69.

(平成26年10月 9日 受付)
(平成27年 1月 8日 受理)